

光源氏の「隠ろへ忍ぶ」女性たち

上野 辰義

はじめに

一 上の品と中の品、「隠ろへ忍ぶ」女たち

二 「隠ろへ忍ぶ」上の品の女たち
―付、「あまた」―

三 「隠ろへ忍ぶ」中の品の女たち

四 「隠ろへ忍ぶ」女たち

光源氏のかかわった女性たちは藤壺宮以下数多い。しかし、物語に登場するのはある意味、語る価値を認められて語り手から選ばれた女性たちなのである。物語には語り手から選ばれず、物語の背景に隠されて姿を現さない女性たちが身分に応じて人数不明のまま存在している。そうした女性たちは、語り手から選ばれて姿を見せ、語られている女性たちとどのように違い、またつながっているのだろうか。それを考えることで、光源氏の女性との関わり方や、物語の構造が見えてくる。

はじめに

光源氏がその生涯に数多くの女性たちと関わったということは、あらためて言うまでもない周知のことがらだが、藤壺宮や葵上、六条御息所など、個々の女性たちとの個別のかかわりの性格は、これまでも十分過ぎるほど繰返し論じられてきた。しかし、藤壺宮以下、物語にその姿を現して、光源氏との関係で個々の役割を果たしつつ、それがゆえに個別の人生も送って独自の存在意義を主張する女性たちのみならず、二条院に伺候する「中将、中務やうの人々」(澤標四八七)、すなわち召人たちはさておいて、源氏物語には筑紫の五節のように複数回登場する女性はまだしも、若紫巻の、「源氏のむらさきの上のもとよりかへり給あか月みてすきかたきいもかかとうたはせし返哥の人」(霧の朝の女)と呼ぶ。岡一男氏『源氏物語事典』巻末系図に「霧朝女」とある)や、花散里巻の、「源氏花ちるさとへおはせしみちなかゝはのわたりにてゑそすきやらぬほとゝきすとこれみつしていはせしところ」(「中川の女」と呼ばれる)(ともに『源氏物語大成』巻七所収の『源氏古系図為氏本』による)など、一回のみの登場で消えていく女性たちもいる。

さらに、帚木巻には、宮中の物忌みが続いて淑景舎に閉

じ込められていた光源氏のもとを頭中将が訪れ、「近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引きいでて」、その相手の女性を知りたがるが、「やむごとくなくせちに隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、うちおき散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、二の町の心やすきなるべし」と語られ、光源氏には多くの文通相手のいたことが知られるし、所謂雨夜の品定めの後、物忌みが明け、梅雨の晴れ間に久々に左大臣邸の葵上を訪れたものの、方塞りにより移動せねばならなくなったときにも、「忍び忍びの御方違へ所はあまたありぬべけれど」と言われ、光源氏が既に多くの女性たちと関わっていたことがおわされる。

実際、初音巻では、二条東院に未摘花と空蟬の尼君を新年の挨拶に廻った後、「かやうにても、御陰に隠れたる人々多かり。みなさしのぞきわたし給ひて、「おぼつかなき日数積もるをりをりあれど、心のうちは怠らずなむ。ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。命を知らぬ」など、なつかしきの給ふ」(七七三)とあり、以前の松風巻で、同院の「北の対は、ことに広く造らせ給ひて、仮にてもあはれとおぼして、ゆく末かけて契り頼め給ひし人々つどひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせ給へる」(五七九)と語られていた計画が、実行されていることが

知られる。このように、源氏物語には、その存在のみ示されて、個別には登場してこない光源氏の女性たちがかなり存在するのである。

だが、われわれは光源氏に関わったそれらすべての女性たちの名を知ってはいない。わたしたちが名を知る藤壺以下の女性たちを一人ひとり挙げていっても、おそらく光源氏の関わった女性のすべてにはならない。ならば、私たちは光源氏の女性関係を、そうしたわれわれの知らない女性たちをも視野に入れて見なければならぬということになる。そうすることで、光源氏の女性関係の全体も見とおせるし、われわれが知る藤壺以下の女性たちの性格や位置もより正確にとらえられてくるというものだろう。

一 上の品と中の品、「隠ろへ忍ぶ」女たち

まず先にも挙げた帚木巻の箇所から見してみよう。

近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引きいでて、中将わりなくゆかしがれば、ゝ、やむごとなくせちに隠し給ふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などに、うちおき散らし給ふべくもあらず、深くとり置き給ふべかめれば、二の町の心やすきなるべし、かたはしづつ見るに、ゝ、心あてに、「それか、かれか」など問ふなかに、言ひあつるもあり、もて離れたるこ

とをも思ひ寄せて、疑ふもをかしとおぼせど、

(帚木五六)

一条兼良の旧年立によれば、光源氏十六歳の夏のこと。光源氏の文通相手であるが、これには「やむごとなくせちに隠したまふべき」相手と、「二の町の心やすきなるべし」と推量される相手とがいることが知られる。前者には藤壺や六条御息所などが想定されよう。後者は、頭中将が文の内容や筆跡から推量しうる女性たちであるから、光源氏と頭中将の二人の重なる交際範囲が核にあり、宮中に滞在するいは行き来する女性たちが中心にいたると思われる。即ち女御・更衣たちの姉妹であり、後宮の女官たちが中心であったとみられる。光源氏の宮中の曹司の厨子に保管してある手紙であることからそう考えられる。この中に宮廷外の父兄の邸宅に秘蔵される貴族社会の一般の姫君たちはそう多くはなかったろう。つまり上の品の女性たちと、職業婦人である中の品の女性たちが主であるとみられる。中の品に属する一般の女性はまず除外される。なぜなら光源氏にとって、中の品の一般女性との交渉はこの直後の空蟬や夕顔（下の品の女とみなされていたが）との場合が最初であったからである。

（方違えに訪れた紀伊守邸を）君はのどやかにがめ給ひて、かの中の品に取りいでて言ひし、このなみな

らむかしとおぼしいづ。…。

(帚木六五)

(空蟬から身分の違いを指摘されて)「そのきはぎはを、まだ知らぬ初ごとぞや。…。」

(帚木七〇)

(空蟬と別れて)すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、隈なく見あつめたる人の言ひしことは、げにとおぼしあはせられけり。

(帚木七三)

かやうのなみなみまでは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし。

(夕顔一〇七)

逆に、光源氏がそれまで具体的に関わった藤壺宮、葵上、式部卿の宮の姫君(朝顔宮)、六条御息所等々の一般女性はその品に属していたということである。

そしてまた帚木三帖で関わった空蟬・軒端萩・夕顔などの中の品の一般女性との関わりは、人妻との交渉、愛人の頓死というスキャンダル性もあって、帚木巻頭・夕顔巻末にいうように、世間に知られてはいけない忍ぶべき「隠ろへごと」であった。

光源氏、名のみことこしう、言ひ消たれ給ふとが多かるに、いとど、かかる好きごとどもを末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむ、と忍び給ひける

隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひきがなさよ。
(帚木三五)

かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍び給ひしものとほしくて、みなもらしとどめたるを、

(夕顔一四六)

しかし、この「隠ろへ忍」ばなければならない関係は、空蟬・夕顔などの中の品の女性に対してではなかった。上の品の女性に対しても同様だったのである。光源氏は、「忍び忍びの御方違へ所はあまたありぬべけれど」(帚木一四六)と、久々に訪れた葵上を氣遣つて紀伊守邸へ来た。そこで中の品の一般女性と初めて交渉する。だから、この「あまた」あるであろう「忍び忍びの御方違へ所」は、中の品出身の宮女関係でなければ上の品の女性のことだ。さらに、「されど、さるべき隈にはよくこそ隠れありき給ふなれ、など言ふにも」(帚木六五)で、想起されるのは、藤壺宮であり六条御息所である。「六条わたりの御忍びありきのころ」(夕顔一〇一)とは、いうまでもなく、六条御息所で上の品だ。

つまり逆に、「隠ろへ忍」ばなくてよい上の品の女性とは、葵上や式部卿の宮の姫君(朝顔宮)などの正式の手続きを踏んで光源氏の妻となりうる女性たちなのである。彼女らは、

式部卿の宮の姫君に、朝顔たてまつり給ひし歌などを、少しほほゆがめて語るも聞こゆ。
(帚木六五)

光源氏が関わりをもった女性たちには、上の品・中の品を問わず、この「隠ろへ忍び給ひし」女性たちと、「隠ろへ忍ぶ」必要のない女性たちと二種あったわけだが、光源氏の関わった女性たちを見ると、もちろん前者の女性たちの方が多かった。

二 「隠ろへ忍ぶ」上の品の女たち

―付、「あまた」―

これまで「忍び忍びの御方違へ所はあまたありぬべけれど」(帚木一四六)と引用してきた、「忍び忍びの御方違へ所」も、上の品の女性たちと考えられたわけだが、それが「あまた」もあるだろうという「あまた」とほどの程度の数なのであるか。『日本国語大辞典』は「あまた」の項の補注で、「あまた」の表わす数量はきまらないが、『源氏』『平家』『徒然草』などの例は、多くは人数で、一、二に止まらないという程度の複数を意味し」といい、『角川古語大辞典』は、副詞の語釈②として、「数量の多いことをいう。平安時代では、上限はたくさんであるが、下限は五、六をもいう。むしろ数えきれないほどをいうよりも、

数えうる範囲内の多さという場合が多い」とする。だが、源氏物語中の例をみると、おおよそ、少なくとも三ヶ以上であれば「あまた」と言いえたようだ。

過ぎにしかた、ことに思ひ悩むべきこともなくて侍りぬべかりし世の中にも、なほ心から、すぎずききことにつけて、もの思ひの絶えずも侍りけるかな。さるまじきことどもの心苦しきがあまた侍りしなかに、つひに心もとけずむすほれてやみぬること、二つなむ侍る。一つは、この過ぎたまひにし御ことよ。

(薄雲六二六)

昔は、行ひせし法師の、いさかなる世に恨みをとめて漂ひありきしほどに、よき女のあまた住み給ひしところに住みつきて、かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨み給ひて、われいかで死なむ、と言ふことを、
(手習二〇〇〇)

これらは想定しうる最低限が三ヶという例。打消しの「あまた…ず」の形も同様である。

中将の君を、こなたにはけどほくもてなしきこえ給へれど、姫君の御かたには、さしもさし放ちきこえ給はずならはし結ふ。…。台盤所、女房のなかは許し給はず。あまたおはせぬ御なからひにて、いとやむごとなくかしづききこえ給へり。

(螢八二〇)

は、二人、冷泉帝を加えても最大三人。

内の大臣は、…。女はあまたもおはせぬを、女御もかくおぼししことのとどこほり給ひ、姫君もかくことたがふさまにてもなし給へば、いと口惜しとおぼす。

(蜚八二二)

こども、まずは二人、玉葛を加えて三人、内大臣の記憶に未登場の近江君まであれば四人。

内裏わたり心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひ給はず。中宮、弘徽殿の女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひ給ふ。さては中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひ給ひける。

(真木柱九五七)

こども、「あまたもさぶらひ給は」ぬ更衣たちは二人のようだ。

かき抱き給ひて、「この君のまみのいとけしきあるかな。小さきほどの児をあまた見ねばにやあらむ、かばかりのほどはただいはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひことなるこそわづらはしけれ。

(横笛一二七二)

これも、まず二人、秘密の冷泉帝を入れて三人。

そして、「あまた」の普通は、四、五人以上のようなだ。限りなき心ざしと言ふとも、春の上の御おぼえに並ぶ

ばかりは、わが心ながらえあるまじくおぼし知りたり。「さてその劣りのつらにては、なにばかりかはあらむわが身一つこそ人よりはことなれ、見む人のあまたがなにかかづらはむ末にては、なにのおぼえかはたけからむ、…」、とみづからおぼし知るに、

(常夏八二二)

——六条院と二条東院の女性たちで、名が知られているのは、玉葛と秋好中宮を除いて五人。ただし、二条東院にはさらに詳細不明の女性たちが複数いる。

御懸想人もあまたまじり給へれば、この大臣かく入りおはしてほど経るを、いかなることにか、と疑ひ給へり。

(行幸九〇六)

——胡蝶巻に、「右近も…、『さらに人の御消息などは聞こえ伝ふること侍らず。さきさきも知らしめし御覧じたる三つ四つは、ひき返ししたなめきこえむもいかごとて、御文ばかりとり入れなどし侍めれど、御返りはさらに。聞こえさせ給ふをりばかりなむ。…』と聞こゆ。『さてこの若やかにむすほれたるは誰がぞ。…』と、ほほ笑みて御覧ずれば、『…。内の大殿の中將の、このさぶらふみることを、もとより見知り給へりける伝へにて侍りける。…』と聞こゆれば」(七九一)とあるところからすれば、求婚者は五人以上いる。

この世に恨み残ることも侍らず。女宮たちのあまた残りどまるゆく先を思ひやるなむ、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。

(若菜上一〇二六)

——同巻に朱雀院の「御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四ところおはしましける」(若菜上一〇二五)とあった。

三の宮は、あまたの御なかに、いとをかしげにてありき給ふを、

(御法一三八七)

——明石中宮腹の親王には、匂宮の弟があと一人はいる。ただこの時点で生まれていたかは不明。女一宮もいる。

であるから、「あまた」ある「忍び忍びの御方違へ所」は、とりあえず三から四、五か所程度あればよいことになる。藤壺は「忍び忍び」ではありえても、「御方違へ所」ではないだろうから、六条御息所に花散里を加えても、われわれの知らない上の品の「忍び忍びの御方違へ所」は、後述する霧の朝の女など少なくともまだ一か所はあったようだ。後の須磨の巻には、須磨に下向してきた光源氏と娘を結婚させる考えを夫の明石入道から聞いた妻は次のようにいう。

母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持ち給ひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへあやまち給ひて、かくも騒が

れ給ふなる人は、まさにかくあやしき山がつを、心とどめ給ひてむや」

(須磨四三〇)

ここにいう光源氏が「いと多く持ち給」う「やむごとなき御妻ども」としてわれわれが指摘しえるのは、紫上、花散里、既に他界している葵上を加えた程度だろう。藤壺は知られていないはずであるし、朧月夜は「帝の御妻」、しかも「忍び忍び」の「隠ろへ忍ぶ」べき女である。須磨という田舎に都の噂として広まっている事柄には正確でないものもあつたであろうから、六条御息所も入るのだろうか。朝顔宮まではさすがに光源氏の妻として京の人の語るところではなかったろう。であるから、「やむごとなき御妻ども」は二人から、せいぜい四人程度だが、「いと多く持ち給」うというのは、二人ではなく葵上、六条御息所あたりまで加えた範囲でないといけないだろう。だが、これも、帚木光源氏十六歳(兼良の年立による)段階の「忍び忍びの御方違へ所はあまたありぬべけれど」の具体を明らかにするものではない。物語に姿を現さない、光源氏の相手になった上の品の女性たちがまだいた。「ありぬべけれ」という推量表現を、語り手による事実をばかす婉曲な表現として理解せず、文字通りの語り手の推量なのだと理解するにしても、世間からは「忍び忍びの御方違へ所はあまたあ」るはずだと、思われる状況が光源氏にはあつたのであ

る。

そのような状況の存在をうかがわせる女性として、あげることができるのが、前掲の『源氏古系図為氏本』にいう「源氏のむらさきの上のもとよりかへり給あか月みてすきかたきいもかかとかなとうたはせし返哥の人」、すなわち霧の朝の女だろう。光源氏は祖母が亡くなつて都の邸に帰つた紫の君を、「霰降り荒れて、すこき夜」に見舞つた。そしてそのまま「単衣ばかりをおしくくみて」紫君と寄り添い一夜を明かして帰ることになる。その状態は実事はないものの、「風少し吹きやみたるに、夜深ういでたまふも、ことあり顔なりや」（若紫一八四）と、女との後朝の別れを想起させるものであつたので、光源氏に実事を欠くことによる満たされぬ思いを抱かせることになった。

かい撫でつつ、かへりみがちにいで給ひぬ。いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひ給ふところの、道なりけるをおぼしいで、門うち叩かせ給へど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して、うたはせ給ふ。…。また人もいで来ねば、帰るもなさけなけれど、明けゆく空もはしたなくて、殿へおはしぬ。をかしかりつる人のなごり恋しく、ひとり笑みしつと臥

し給へり。

（若紫一八四）

この霧の朝の女は、上の品の女性とみられる。というのは、はじめに示した『源氏古系図為氏本』にいう花散里巻の、「源氏花ちるさとへおはせしみちなかゝはのわたりにてゑそすきやらぬほとゝきすこれみつしていはせしところ」の中川の女の家が、「ささやかなる家の…、門近なるところなれば」（三八七頁）とあつて、この後「かやうのきはに、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづおぼしいづ」（花散里三八八）とあるように中の品の女であるのに対し、霧の朝の女の場合は、「門うち叩かせ給へど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人して、うたはせ給ふ。…と二返りばかりうたひたるに、よしある下仕ひをいだして」（若紫一八四）とあるところからは、中の品の家と判断する理由がないからである。そして同じく中川の女が、「ただひと目見給ひし宿りなり、と見給ふ、ただならず。ほど経にける、おぼめかしくや、とつつましけれど」（花散里三八八）と一度のみ契つた女性であるのに対し、この霧の朝の女は「いと忍びて通ひ給ふ」（若紫一八四）と、持続的に関わりの継続している女性であつた。こうして、この霧の朝の女は、十分「忍び忍びの御方違え所」の一つである可能性をもつ。だが、若紫君の家から二条院へ戻る「道なりけるをおぼしいで、門うち叩かせ」

たように、光源氏の女性たちの中では常に注意がされてはいないような、重要度の低い存在だったのである。

こうした光源氏にとって重要度の低い女性たちは、二条東院に引きとられた無名の何人かのように、まだほかにもいたらしい。そうした女性たちは、光源氏にとっても、また語り手にとっても、後世に伝える価値ある存在・事件をもたなかったから、物語の背景に沈んでいるのである。この霧の朝の女もそうなるところだったが、この朝、若紫君の家から二条院へ戻る「道なりけるをおぼし」出されて物語の表面に一度だけ言及される機会を得た。その思い出されて、語られた理由は、『新編日本古典文学全集』本が頭注で、「例ならぬ後朝ゆえに満たされぬ源氏は、行きずりに女の門を叩く。その不首尾がかえって紫の上の名残を味わわせる趣向である」（一卷二四七頁）というところだろう。紫君の背後に藤壺宮の影を見つつ、心に怡憚しながらも、満たされずに別れた肉体の奥底の情動が場当たり的にこの霧の朝の女を物語の表面に呼び出したのである。こうした機会も得ずに終わった他の女性たちの存在を、この女性はどうかがわたせる。

三 「隠ろへ忍ぶ」中の品の女たち

こうした「隠ろへ忍ぶ」上の品の女たちに対して、中の

品にも同様の女性たちがいた。既に記したように、帚木三帖で関わった空蟬・軒端荻・夕顔などの中の品の女性との関わり自体が、世間に知られてはいけない忍ぶべき「隠ろへごと」であった。そこには、人妻との交渉、愛人の頓死というスキャンダル性も関わっているのだが、このような条件が存在しなくても、上の品の女性とさえ「隠ろへ忍んでいたのであるから、身分差のより大きい中の品の女性との関わりで「隠ろへ忍ぶ」ことはまして多くあつたろう。そうした様子をうかがわせてくれるのが、さきにも言及した、花散里巻に登場する中川の女である。この女は、光源氏がそれまでに「ただひと目見給ひし宿り」であり、その時から声をかけるのもつつましくなるまで「ほど経にける」状況であった。

彼女を思い出したのは、政治的にも、また女性たちとの交渉においても公私にわたって追い込まれ環境が変動しつつあった光源氏が、おしよせる内面の「あはれ」の共鳴する一つとして花散里を思い出し、思いを抑えられずに訪問を思い立ったことによる。その道すがら、「忍びて中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の木立などよしばめるに、よく鳴る琴を東に調べてかき合はせにぎはしく弾きなす」音に「御耳とまりて」たちどまり、「門近なるところなれば、少しさしいでて見入れ給へば、大きなる桂の

樹の追ひ風に、祭のころおぼしいでられて、そこはかとなくけはひをかしきを、ただひと目見給ひし宿りなり」と、と思ひ出したのである。おそらく賀茂の祭かその時期と関わりのある女なのであらう。その時期に一度だけ逢瀬をもったというなら再訪もないまま短くて一月ほどの時が経っている。光源氏にとって「いと忍びて通」う霧の朝の女以上に存在が軽いのである。そして女の身分は、「かやうのきはに、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづおぼしいづ」と語られるように、従四位下相当の太宰大貳の娘と同様、中の品であつた。

この女の存在を、光源氏は花散里を訪ねる途中に思ひ出した。前回一度逢つてからかなりの時が過ぎていて二人の心理的なつながりは空疎なものになっており、再訪を告げるのは気がひけることであつたが、光源氏はそのままでは語られていた、関わりをもつた女を気がすまないなどマイナスの事情があつても、「さすがに忘れもはて給は」ぬ光源氏の性格による。同じ性格により、この中川の女を思ひ出すきっかけとなつた花散里君訪問もひきおこされてゐた。花散里は、朧月夜君と同様に「内裏わたりにてはかなうほのめきたまひし」結ばれ方で、かつ朧月夜とは異なり、さほど光源氏の心も惹かなかつたが、父桐壺院の麗景

殿女御の妹であるという縁もあつて、「さすがに忘れもはて給は」ぬこの「例の御心」により、光源氏の訪れがひきおこされていた。

こうした癖により、光源氏は中川の女の家を通り過ぎることができず、惟光に案内を問わせたが、女にはこの間に新たな男ができたなど素直に復縁できない事情があつたのか、光源氏と気づきながらも不審がる態度をとつた。神野藤昭夫氏のいわれるように、同一の光源氏の「例の御心」、一度でも関わりをもつた女を忘れることがないという愛情の在り方に関わりながら、それに「応える存在としての三の君（花散里のこと、引用者注）」と、それを『あいなし』と離れることになつた中川の女とが対比させられているというのが、『花散里』巻の基本構図^③なのである。

この中川の女も、一度のみ逢つて以後かなりの空白の時を経ていることから、その関係が光源氏にとって「隠ろへ忍ぶ」ものであることがうかがわれるし、花散里も「内裏わたりにてはかなうほのめき給ひし」結ばれ方をしていること、そしてその後、縁は切れないものの、いまだに姉である麗景殿女御の陰に隠れて、光源氏の訪問もまず姉女御への挨拶と歌の贈答が表に語られ、花散里に関しては、その居室である「西面には、わざとなくしのびやかにうちふるまひ給ひてのぞきたまへる」と、姉女御訪問のついで

のように扱われていることなどから、同様にその関係が光源氏にとって「隠ろへ忍ぶ」ものであることがうかがわれる。

さらに、中川の女との関連で、「かやうのきはに、筑紫の五節がらうたげなりしはや、とまづおぼしい」でられている筑紫の五節も、光源氏にとって「隠ろへ忍ぶ」存在であったとみられる。後の少女巻にその年の五節の舞姫を見て光源氏は、「昔御目とまり給ひし少女の姿おぼし出」で、筑紫の五節に手紙を豊明の節会の行われる「辰の日の暮れつかたつかは」した。彼女からの返歌に「かけて言へば今日のこととおもほゆる日かげの霜の袖にとけしも」（六九八）と、二人の交情の最初がこの日、またはこの期間のことであったことがほめかされているから、公然の関係ではない。須磨巻で筑紫から瀬戸内を経て都に帰る大弐の一行が、須磨の光源氏に挨拶する際も、大弐の消息を息子の筑前守が携えて出向いているのに、五節君は自身の消息を兄弟の筑前守に託すのではなく別に、「五節は、とかくして聞こえたり」（四二六）とあれこれ算段をつけて光源氏に届けているのも、日陰者のつながりであったからである。

花散里や筑紫の五節が、光源氏にとってこうした「隠ろへ忍ぶ」存在であったにもかかわらず、そのかわりが中

川の女のように一度きりで切れることなく断続的にしろ続いたのは、花散里巻末に語られるように、光源氏の関わる女性たちは、何らかの美質・長所をもっており、こうした「隠ろへ忍ぶ」関係を事情を理解して受けいれ、陰もなく思いやりをもつて交際のマナーを守っていたからであった。かりにも、見給ふ限りは、おしなべてのきはにはあらず、さまざまにつけて、言ふかひなしとおぼさるはず、なければにや、憎げなく、われも人もなさけをかはしつゝ過ぐし給ふなりけり。

（花散里三九〇）

これに対し、中川の女は、こうした光源氏との在り方を面白くなく「あいなしと思」って受け入れられず、新たに男をつくるなどして心変わりする人であり、光源氏は、こうした女性の存在を「とにかくに変はるもことわりの世のさが、と思ひなし」（花散里三九〇）でいた。須磨行き直前の不遇不如意の時期に、世間と人の真実の姿を知ることになったのである。

「隠ろへ忍ぶ」中の品の女である中川の女は、光源氏とは一度きりの逢瀬を持ち、その後も長い間忘れ去られるような存在の軽い女性であったが、「隠ろへ忍ぶ」上の品の女である花散里、さらには同類の女である筑紫の五節との対比のため、花散里巻にその姿を現すことになった。光源氏の公私の変動期に、不変の真実の人間関係と対比的に、

変わりゆく世情を背景として光源氏の愛情の在り方を受けいれられずに愛心していく通俗的な人の心を例示するために、こうした事情がなければほとんど登場する機会がなかったであろう存在感も人間的魅力も薄い女が、姿を現し得たのである。であるからその一方、光源氏に思い出されることもなく、登場する機会を得ずに終わった同類の女は他にもいたであろうと思われる。

四 「隠ろへ忍ぶ」女たち

このような「隠ろへ忍ぶ」女たちが多数いたことは、光源氏が須磨に退き、都に不在となる状況が出現する際に、光源氏の身を案じ、光源氏を頼りとして来た自身のこれらを案じる人々として再び言及される。

かの花散里にも、おはし通ふことこそまれなれ、心細くあはれなる御ありさまを、この御陰に隠れてものし給へば、おぼし嘆きたるさまも、いとことわりなり。

なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひ給ひしところどころ、人知れぬ心をくだき給ふ人ぞ多かりける。

入道の宮よりも、ものの聞こえやまたいかがりなさむ、とわが御ためつつましかれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。

(須磨三九六)

直後に、「なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひ給ひ

しところどころ」には相当しない藤壺宮からも心配の手紙がもたらされるのは、二人の秘密の子である東宮の将来が案じられるからである。同様に、霧の朝の女のような「なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひ給ひしところどころ」であつても、光源氏とのつながりの弱体化が自身の生活の質に影響を与えるものだったと思われる。もつとも「なほざりにてもほのかに見たてまつり通ひ給ひしところどころ」自体のそうした様は具体的には語られない。だが、そうした様を推測させるのが同時期の末摘花の生活であつた。

契りを交わした女であつても、「かりにも、見給ふ限りは、おしなべてのきはにはあらず、さまさまにつけて、言ふかひなしとおぼさるるはなければにや」と花散里巻で語られた何らかの美質・長所を光源氏に主張できなかった末摘花は、負の評価の多さゆえに、「世の常なるほどの、ことなることなさならば思ひ捨ててもやみぬべき」女であつたが、雪の朝にその醜女ぶりを「さだかに見給ひて後は、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに、常に訪れたまふ」(末摘花二三三)と、逆に光源氏の同情をひいて、彼の庇護を蒙った。「頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にも、をさをさ劣るまじう」(末摘花二二二)と評価された黒髪も、「おしなべてのきは」をそう出るものでもなかったのだろう。

この末摘花が、光源氏の須磨明石滞在時代、どれほど窮乏した生活を送っていたかは蓬生巻に詳しい。

藻塩たれつつわび給ひしころほひ、都にも、さまざまにおぼし嘆く人多かりしを、さてもわが御身のよりどころあるは、ひとかたの思ひこそ苦しげなりしか、…、なかなか、その数と人にも知られず、たち別れ給ひしほどの御ありさまをも、よそのことに思ひやり給ふ人々の、下の心くだき給ふたぐひ多かり。

（蓬生五一九）

光源氏の関わる女性と世間にも知られず、隠れ忍ぶ存在の女性たちは、光源氏の須磨行きを内心悶々として遠く離れてながめ聞くだけであつたのだが、その一例として「常陸の宮の君」末摘花が取り上げられる。光源氏の女となつて以後、彼女は光源氏の庇護で人並みの生活を過ごせていたが、光源氏が須磨に退く状況に陥つてからは、光源氏は世の不如意に心と身を沈めて、末摘花のような「わざと深からぬかたの心ざしはうち忘れたるやうに」（蓬生五一九）なり、都を離れてからはわざわざそのような女に音信を送る余裕もなくなつていた。末摘花は光源氏に出会う前の生活、あるいはそれ以上の窮乏した生活に戻つていたのである。帰京しても光源氏は、久々にともに過ごせ、一段と美しくなつた紫上に没頭して、「いとやむごとなくおぼされ

ぬところどころには、わざともえ訪れ給はず」（蓬生五三二）、まして末摘花などは、「その人はまだ世にやおはすらむとばかりおぼしいづるをりもあれど、尋ね給ふべき御心ざしもいそがであり」（蓬生五三二）経ていた。それが、たまたま花散里の存在を思い出して彼女を訪問する道すがら、偶然末摘花邸の傍らを通り再会することになつたのである。光源氏は、花散里巻冒頭で語られていたように、一度でも逢つた女は忘れきれない性格であるといつても、個々の女性に対する扱いようは、紫上以下隠れ忍ぶ女たちまで、光源氏の気持ち・愛情に応じてさまざまであつたのである。末摘花は、物語に顔を出さない他の隠れ忍ぶ女たちの実態を、彼女の個別的状况において指示している。

こうして源氏物語には、上の品から中の品にわたつて、物語に顔を出さず個性を与えられていない隠れ忍ぶ女性たちがいる。だが彼女らは無意味に物語の背後におしこめられているわけではない。彼女らと連なりつつ、霧の朝の女や中川の女のように物語に顔を出し、花散里や末摘花、筑紫の五節のように個性を与えられて語るべき人柄・事件を持つがゆえに物語に繰返し登場してくる女性たちがその延長線上にいる。さらには、物語で大いに語られる藤壺宮や六条御息所・朧月夜のような上の品の女性たち、空蟬や軒

端荻・夕顔のような中の品の女性たちさえ、そもそもは光源氏にとって隠れ忍ぶ女性たちであった。葵上や朝顔姫君、女三宮のように隠れ忍ぶ必要のない女性たちの方が、数としてはずっと少ないのである。紫上はその中間に位置するであろうか。

光源氏のかかわった女性たちがこうした多数の隠れ忍ぶ存在として構造化されていることを、私たちは十分認識しておく必要がある。光源氏の「色好み」や「すき」、女性に向けられる嗜好や内面の渴望というものが、世間の目から遮られ、陰の世界に根差す部分の多いものであることが、あらためて思い知らされる。

注

- (1) 源氏物語の引用は、『源氏物語大成校異篇』による。数字はページ数。適宜本文を訂し漢字をあて、句読点をほどこす。
- (2) 『源氏物語大成校異篇』によれば池田本がこれに同じ本文をもつ。
- (3) 神野藤昭夫『「花散里」巻をどう読むか―その和歌的発想と表現―』『源氏物語の鑑賞と基礎知識』29、二〇〇三年六月
- (4) 「きは」という語は、程度や身分を表わすが、源氏物語において「おしなべてのきは」という言い方はこの他に二例あり、いずれも程度を表わしている。花散里巻例もまず、程度の意味にとるべきだろう。
かの撫子を忘れ給はず、…。君達にも、「もしさやうなる

名のりする人あらば、耳とどめよ。心のすきびにまかせて、さるまじきことも多かりし中に、これは、いと、しかおしなべてのきはにも思はざりし人の、はかなきものうむじをして、かく少なかりけるもののくさはひ一つを失ひたることの口惜しきこと」と、常にの給ひいづ。

(蜚八二二)

この皇女の御母女御こそは、かの宮の御はらからにもし給ひけめ。容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれ給ひし人なりしかば、いづかたにつけても、この姫宮おしなべてのきはには、よもおはせじを」など、

(若菜上一〇四二)

もつとも、桐壺巻の次の例は身分を表わしているが、語形が異なる。

はじめより、おし並べての上宮仕へし給ふべききはにはあらざりき。

(桐壺六)